

コメント

信ずることと愛すること

中川 純男

『告白』第一巻冒頭のテキストをめぐる荒井氏の論点は、テキストの区分にしたがって、大きく二つに分けられる。前半部については、*fecisti nos ad te* の *ad* という前置詞の意味と意志あるいは愛の働きを中心に、後半部については、信と知の順序を中心に論じられていると思われる。ここではまず後半部についての荒井氏の分析を先に取り上げ、次いで前半部の分析が提起する問題を考えることにしたい。段落、行番号は荒井氏の使用されたものである。

後半部についての荒井氏の論点は、おおよそ次のようであると理解する。Da mihi, domine で始まる第四連で提出された「知ること」が先か「呼び求めること」が先かという問いは、直接的には答えられていない。しかし第六連 23 行目 *Quaeram te, domine, inuocans te* が実質的な答えとなっている。なぜなら、第五連で「呼び求めること」は信の系列の最後に、「探求すること」は知の系列の最初に位置することが明らかにされ、23 行目は「呼び求めること」から「探求すること」へ、という順序でこの二つの系列を結びつけていると考えられるからである。したがって、この箇所は、順序を明確にして「もしも私があなたをすでに呼び求めているなら、私はさらに進んであなたを探し求めましょう」と訳すことができる。イザヤ書 7, 9 のことば「あなたがたは信じなければ理解しないであろう」が隠れたモチーフとなっている。荒井氏の論点をこのように理解した上で、次のような問題を提起したい。

第四連で「呼び求めること」といづれが先かを問われた「知ること」を荒井氏は、信と対比される意味での「知」であると解釈する。しかし、15, 16 行目に用いられている *nescire* に注目してみよう。ここに含意されている *scire* は、O'Donnell も指摘しているように¹⁾、*credere* ときわめて近い意味で用いられている。「あなたを知らなければ、誰があなたを呼び求めるだろうか」と言われ、「知らなければ別のものを呼び求めるかもしれない」と言われるとき必要とされる「あなたについての知」は、宣べ伝えられること *praedicari* によって与えられると考えられるからである。

それゆえ第四連から第五連にかけての論理は次のように理解される。「呼び求める

ために知る」と言われる場合と、「知るために呼び求める」と言われる場合とでは「知る」の意味は同じではない。したがってこの二つの命題は必ずしも矛盾しない。しかし第四連では、この二つの意味を同じことばで「知る」と表現することにより、一種の対話が生まれている。すなわち、14行目で、「呼び求めること」から「知ること」へという順序を想定したアウグスティヌスは、15行目で「しかし sed」と、「知ること」から「呼び求めること」へという反対の可能性を提示する。だが、17行目では「呼び求める」ことから「知ること」へという可能性も依然有力であることを告げている。ところが第五連では、聖書のことばを手がかりに、「知る」が *credere* と *inuenire* とに分化される。第五連最初の文 *Quomodo autem inuocabunt, in quem non crediderunt?* は、第四連の最後に示された可能性を再び、今度は *scire* を *credere in* と言い換え、意味を限定した上で反論している。この箇所が聖書のことばを念頭に置いているにも関わらず、疑問文であるのは、それが直前に語ったことへの反問となっているからである。

後半部の文脈をこのように理解することが許されるなら、そこでアウグスティヌスが問題としていることは何であると言えるのか。第四連の *scire* は *credere* を排除しない *scire* であるから、ここでアウグスティヌスが問うているのは、信が先か知が先かという問題ではない。「信じなければ理解しないであろう」というモチーフはむしろ、第四連最初のことば、*Da mihi, domine, scire et intellegere* に現れているのではないか。神に向かって知を求め、聖書のことばを手がかりに探求を進める後半部の全体が、実は「知を求める信」の運動そのものではないであろうか。荒井氏は、最初の問い、すなわち第四連13行目の問いにある「讃えること」「呼び求めること」が、いずれも事実としてすでに成立していること、すなわちアウグスティヌスはすでにそれを行っていることを指摘された。この指摘にわたしも同意する。アウグスティヌスは、自分が現に行っていることは何かを問うている。順序の系列を明らかにすることは、自分がどこにいるかを明らかにすること、自分がすでに何者であり、今から何をしようとしているかを、明らかにすることである。「あなたはすでに宣べ伝えられており」、「わたしに信仰を与えられている」と言われる。*praedicatus es, dedisti, inspirasti*, いずれも完了形で語られていることに注意しなければならない。これに対し、今からなすべきことは「呼び求めること」であり、「探求すること」である。このような解釈は、荒井氏の結論と、それほど大きく異なるものではない。なぜなら、

荒井氏は、『告白』を呼びかけ *inuocare* に始まり、呼びかけに終わる長い挿入と捉えることができるとの解釈を結論として提示しておられるからである。

この論点が、前半部のテキストの荒井氏による解釈と、密接に関係している。第三連9行目の *fecisti nos ad te* ということばについて、荒井氏は「あなたは私たちをあなた自身へと向かって誉め讃えるようにと・呼び求めるようにと・探し求めるようにと・語りかけるようにと造った」という意味を読みとりたいと言われる。*ad* という前置詞によって示された神への方向性を意志、あるいは愛の働きと重ね合わせることによって解明することが、荒井氏の前半部解釈の主眼であると言えよう。愛は休息の場所を求める。最終的な休息の場所は「あなたの内」*in te* である。この「あなたの内」を目指すことも、そこから遠ざかることもいずれも愛の運動である。愛は双方向的である。しかし、「神に向かっている」としても、「神から離れつつある」としても、*requiescere* していない限り、心は *inquietus* である。したがって *inquietudo* もまた双方向的である。このように荒井氏は解釈されていると思われる。厳密にいうなら、アウグスティヌスにおいて双方向的であるのは愛そのものではなく、愛する主体であり、*inquietus* という語の、語としての意味は「休息 *quies* がないこと」であって、それ以上に「愛の胸騒ぎ」といった意味を読み込むのは無理ではないかと思われるが、大筋において、荒井氏の理解は、アウグスティヌスに即した理解であると思われる。

これらの立論のため、荒井氏が提出されたテキストは、休息と愛との関係を理解する上で、きわめて重要な問題を明らかにしているように思われる。神から離れゆく愛も、ある意味では休息を求めている。しかし、神以外のところに真実の休息はない。したがって、「休息」は二重の意味で語られている。このことはまた、*ad* という前置詞も二通りの場面で使われることを告げている。一つはもちろん「神を目指す」運動の方向性を表すために用いられる場合である。引用された『ソリロキア』のテキストに用いられている *ad* はすべてこの意味である²⁾。しかしたとえ「神から離れつつある」としても、真実の休息が神においてしか与えられないことに、変わりはない。したがって「神から離れつつある」魂も、この意味での神への方向性は失ってはいないはずである。この二重の方向性の区別は荒井氏の論述の中ではそれほど徹底されていないように思われる。

しかし、アウグスティヌスにおいて、この二重の意志を区別することはきわめて重

要である。なぜなら、人間は回心によって神を目指さない限り、たとえ神に向かって造られているとしても、神から離れてゆく存在として、理解されているからである。このような人間理解が、「罪のしるしを身に帯びた人間」と語らせているのである。神から離れてゆく人間に、回心を迫り、神へと向かわせるのは、人間の意志ではない。神の愛である。偽りの休息に休らおうとする人間を、偽りの休息から追い立てる *excitare*³⁾ 神の愛が促す意志決定は、神から離れてゆく存在である人間にとって、自覚的な意志決定以外ではありえない。アウグスティヌスは、このような明確に自覚された意志にもとづいて神を呼び求めようとしている。 *fecisti nos ad te* と言われるときの *ad* と、神に向かいあるいは神から離れる「双方向性」の中での *ad* とを、区別することなく同列に論じることにはできないように思われる。

註

- 1) Augustine, *Confessions II*, Commentary on Books 1-7, J. J. O'Donnell, Oxford, 1992, p.17.
- 2) 何らかの方向性をもった運動を表す動詞とともに用いられている *ad* は、その方向性を明示する働きをしていると解釈できる。『ソリロキア』I,1,5-6 の *ad* はすべてこの用例である。しかし、*fecisti nos ad te* という文にはそのような動詞が用いられていない。少なくとも *facere* の通常の意味にそのような方向性を読みとることは困難である。それゆえ、この *ad* の解釈が問題になるのである。
- 3) *excitare* の第一義的な意味は *Oxford Latin Dictionary* によれば、To cause to move (from a position of rest) である。とすれば、この基本的語義において、何らかの休息の場から *ex* 追い立てるというニュアンスは含まれていることになる。たとえば、*Conf. X, 3, 4.* に *confessiones praeteritorum malorum meorum... excitant cor, ne dormiat in desperatione* という用例がある。

* * *

討論報告（司会者）

宮谷 宣史

学会における研究発表のさい、司会の役を果たした私に、何か書くようにとの依頼を受けた。当日、荒井洋一氏のよく用意された研究発表と、それに対する中川純男氏の